東南アジアにおける生活デザインのハイブリッド性についての調査研究

ープラナカン・デザインの現代的役割を探る試みー(2)

ON THE CULTURAL HYBRIDNESS OF EVERDAY LIFE DESIGN IN SOUTHEAST ASIA

Focusing On the Modern Roles of Peranakan Designs (2)

今村　文彦　　芸術工学教育センター　教授
見寺　貞子　　芸術工学部ファッションデザイン学科　教授
長野　真紀　　芸術工学部環境デザイン学科　助教

Fumihiko IMAMURA　Center for Art and Design Education, Professor
Sadako MITERA　Department of Fashion and Textile Design, School of Arts and Design, Professor
Maki NAGANO　Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Assistant Professor

要旨

本報告は、東南アジアの生活デザインにみられるハイブリッド性を探る試みとして、「プラナカン様式」という東洋(中国、マレー)と西洋を折衷、融合させたデザインに焦点をあて、その歴史的背景、建築、服飾、インテリア、生活用品等の生活全般におよぶデザインの特色および近年になって再評価されている現代的な意味について検討するものである。

2018 年度は、2017 年度の研究成果を補足しさらに、深化させることを目的に、マラッカで再度現地調査を実施した。調査研究のテーマを、ショップハウスの街並み構成と装飾デザイン、伝統的な装身具と現代のデザイン、密集する多様な宗教施設の 3 つに絞り、マラッカのプラナカン文化について理解を深めた。

これらの一連の調査分析を通じて、プラナカンがつくりだしたショップハウスの融合的折衷的な景観は、点在する宗教施設の多様性とともに、植民地の歴史を踏まえたマラッカの独自性に大きな貢献を果たしている。また、プラナカン女性の装身具にみられる文化的複合性は、現代ではマレー文化のアイデンティティと結びつけられて語られていることが明らかになった。今後は、マラッカをはじめとして、ペナン等の他の地域での具体的な生活のありようを探り、プラナカンの生活の全体像を把握することが必要である。

Summary

This report attempts to make clear the hybridness of everyday cultural designs in Southeast Asia, through focusing on the Peranakan designs, which made compromise between Eastern cultures (Chinese, Malay) and Western ones. Peranakan designs including architecture, fashion and interior, are reevaluated as cultural heritage of national unity and tourism in Malaysia and Singapore.

In this year, we carried out intensive researches at Malacca again on the townscape and façade of shophouses, accessories including beads sandal and breastpin for Peranakan lady and various religious facilities from viewpoint of cultural complexity and merging design.

We could understand the fusional and eclectic townscape of shophouse arranging Chinese motifs and European motifs which is characteristic of Peranakan, have been contributing the uniqueness of Malacca as historical town.

We would like to study the wholeness of everyday life of Peranakan from researching at other Peranakan town in Southeast Asia.

1. 研究目的

本研究は東南アジアの生活デザインのあり方、現状を探る試みとして、「プラナカン様式」という東洋（中国、マレー）と西洋を折衷、融合させたデザインに焦点をあて、その歴史的経緯および建築、服飾、インテリア、生活用品等に用いられた装飾や色彩の生活デザインの特徴について現地調査をもとに明らかにするものである。また近年、マラッカ、ペナン、シンガポールではプラナカン様式が民族的統合の象徴として取りあげられ、観光資源としても再評価されているが、その現代的な意味についても検討する。東南アジアにおける生活デザインを特徴づけるものの一つにハイブリッド性（融合性）を指摘することができる。この地域は古くからインド洋や南シナ海の海上交通を通じて民族間の社会的文化的交流が活発におこなわれ、仏教やヒンドゥー教をはじめとする新たな文化的要素も排除することなく重層的包摂的に取り込み、巧みに独自の世界を構成してきた。

本研究を通じて、多様で異質な要素を融合し、独自の表現様式を生みだしてきたハイブリッド性の具体相とその社会的文化的背景について、プラナカンを例としてアジアの文化史的文脈の中で解明することを最終的な目的とする。

2. 研究の背景－プラナカンと生活デザイン－

東南アジア、とくにマレー半島、ジャワ島では15世紀以降にヨーロッパ諸国による植民地化（香辛料交易、ゴム・プランテーション、錫鉱山経営等）が進む一方で、清代末（19世紀後半）の内乱や飢饉により中国南部地域（福建、客家、潮州、広州、海南島等）から排出された大量の華人移民が南洋の植民地で交易、肉体労働（主に苦力）に従事した。中国本土では女性の海外渡航が禁止されていたことから移民の大半を占める男性は現地人女性（マレー系、インドネシア系）と結婚し次第に土着化した。プラナカン(Peranakan)とは、彼らの現地生まれの混血子孫を示す。

イギリスの「海峡植民地」であったペナン、マラッカ、シンガポールの富裕なプラナカンは植民地政府と結びつき、19世紀後半から20世紀前半にかけて中国の伝統的生活様式と欧米の新しい生活様式を融合、折衷させた独自の生活スタイルである「プラナカン様式」を創出した。プラナカン様式は芸術、建築（ショップハウス）、インテリア、生活用品、料理、服飾、生活習慣、人生儀礼等の生活全般におよび、模様（花、植物）、色彩等のデザインに特徴がある。

2018年度は2017年度で得られたテーマを深めるために8月にマラッカで2度目の現地調査を実施した。以下では、ショップハウスの装飾デザイン、プラナカン女性の装身具のデザイン、宗教施設のそれぞれの融合性、複合性について報告する。なお、これらの報告は2018年10月27日に富山大学芸術文化学部で開催された芸術工学会秋期大会での発表内容を加筆修正したものである[注1]。

3. 建築ファサード装飾に見る伝統的デザインの特性

2017年度に引き続き、マレーシア・マラッカの旧市街世界遺産保存地区に現存するショップハウスを対象に、建物用途変更による街区空間の変遷と、建築ファサード装飾に見る伝統的デザインの特性について調査をすすめた。東・東南アジアの華人居住地域に分布するショップハウスは、マラッカでも支配的である。1階が店舗空間、2階以上が居住空間として利用される中低層複合住居で、植民地都市では労働者や移民を受け入れるため都市計画において大量に建設された歴史を持つ。建設年代により多様な様式が存在し、建物配置、用途分布、連続ファサード写真、建物装飾物の調査・分類からデザイン要素を抽出し、東洋と西洋の文化的要素が融合する建築様式の経年変化とプラナカン独自の融合性を読み取った。

マラッカで労働者の中で多くの比率を占めた中国系移民の住居を効率的に確保するため、間口が狭く奥行のある職住併用の中庭を持つショップハウスが大量に建設されたのは、オランダ植民地時代(1641-1824)に始まる。街路に面した1階部分にはfive-foot way(亭子脚)と呼ばれるアーケードを持ち、公・私空間の中間領域を形成している。旧市街は、群としてプラナカン建築が多数残る「伝統的建築区域」、多くの観光用店舗が立ち並ぶ「観光区域」、地域の生活が色濃く残る「居住区域」、倉庫や居住者用の小規模店舗が分散する「商業区域」の4区域に分けることができ

る。世界遺産指定後は観光客数が大幅に増加し、かつての繁栄を誇った家屋がビジネス事業所へと用途変更している。既往研究[注2]の建物用途分布調査の事業所数を見ると、1995年43店舗、2001年122店舗であった。2017年に実施した本調査では242店舗が確認され、ホテル、カフェ、レストラン、ギャラリーなど従来の店舗以外に、衣料品店、博物館、マッサージ店などが新たに見られた。商業施設の増加に伴いファサード色彩変更、看板設置、室外機の表出、1階入口シャッター設置などの改装が行われ、特に観光区域ではショップハウスの文化財としての修景水準の低さが際立っていた（写真1）。1966年施行のRent Restriction Act（家賃統制令）[注3]が2000年に撤廃されたことにより建物更新の抑制が失われ、近年は観光客誘致を優先した店舗が増加している。また、旧市街の文化財登録された建造物のうち8割が住宅であるが、個人の建造物の保護・保存は難しく、マネージメントプランを軽視する所有者に対しては注意・助言がされているが、罰則も緩いため実効が伴っていない[注4]。

写真1.　景観への配慮を欠いた観光地区の街並み

写真2.　初期ショップハウスで構成された落ち着いた街並み

前年度の研究で明らかになった9様式のショップハウス類型に基づき、街並みを構成しているファサードのデザイン特性と装飾物、階数、年代について調査・分析を行った。伝統的建築区域の172棟を対象に調査した結果、オランダ植民地時代に建設されたオランダ様式と中国南部様式が、全体の6割（103棟）を占めていた。両様式は、1800年代後期以降に建てられたイギリス植民地時代の様式と比較してデザインがシンプルである。装飾物は、扁額、対聯、提燈、花や動植物のレリーフ、タイルが窓、入口扉、胴差し部、上階壁面に多く施され、幾何学紋様も随所で見られたが、装飾物がまったくない建物も61棟あった。通り抜け可能なfive-foot wayの多くは、防犯やプライバシー保護が契機となり、袖壁や柵の設置、植物が置かれ、空間の連続性は失われている。現在では専用住宅としての機能も高く、私有空間として使用している例も多く見られた。

マラッカのショップハウスは、①他の植民地都市より多く現存するオランダ植民地時代特有の下屋を持つ空間構造、②装飾性を抑えたファサード、③各戸の独立したデザインと建物の高さが特徴的である。マレーシアの他都市やシンガポールのショップハウスの多くは華美で、隣接する建物と開口部や軒高などの水平ラインを合わせて景観の連続性を意識しているが、ここでは個々の質実なデザインが尊重され、それが群となり街並みを形成している。植民地時代の各宗主国と中国の様式を融合し、マラッカにおけるプラナカン建築固有の景観を生み出している（写真2）。

（3. 執筆：長野真紀）

4. 装身具のモチーフから見たプラナカン女性の伝統的デザイン

プラナカンの女性は、マレーや中国の伝統的なデザインだけでなく、積極的にヨーロッパのデザインも取り入れ、現代にも継承される独自のファッションスタイルを生み出した。彼女らはクバヤとサロン、アクセサリー、サンダルを身にまとい豪華に着飾った。クバヤは前開きのブラウスで、クロサンと呼ばれる三連のブローチをつける（写真3）。サロンはバティックを円筒状に縫い合わせて腰に巻き付け

写真 3.　プラナカン女性の盛装とクロサン[注5]

着用する。プラナカン女性の服装で欠かすことの出来ないのがアクセサリーとサンダルであるが、留め具がないクバヤを着用する上でクロサンは不可欠なアクセサリーと考えることができる。ここでは、クロサンとサンダルのモチーフの意味やプラナカン女性の伝統的デザインを明らかにすることを目的として、2017 年度に引き続いてマラッカの博物館等で収蔵品の調査、ヒアリングを実施するとともに、観光客向け店舗で販売されている市販品を調査し、伝統的なものと比較対照した。

クロサンは主な素材に金とダイヤモンドが用いられ、形状により未婚や既婚を表したり、服喪中に着用するものなど名称や意味が異なる。花や葉をモチーフに用いたクロサンはクバヤやサロンの植物の流線的なデザインと相性が良く、自由度が高いからだと想定できる。市販品は収蔵品を模しているものが多く、モチーフに違いは見られなかった。全体的にモチーフとしては葉や花が多く、桂花など人徳を意味するモチーフ、「知足常楽」の「知足 (zhī zú)」と発音が同じことから「蜘蛛」、「双双対対」の「夫婦そろって」を意味する「蝶」なども使われていた (写真 4)。これらの分析から、クロサンには中国由来の瑞祥シンボルをモチーフや形状に多用していたことが明らかとなった[注6]。現在でもクロサンはクバヤやサロンと合わせて販売されているが、コーディネートに合うことが優先されている。

写真 4.　蜘蛛をモチーフにしたクロサン

写真 5.　ビーズ刺繍のサンダル (19 世紀後半)

サンダルは主に婚礼用の履物であった。19 世紀頃には金糸やシルク糸、ワイヤー刺繍が施されていたが、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてビーズが輸入されると、ビーズ刺繍が主流となった (写真 5)。プラナカン女性にとって刺繍は花嫁修業の嗜みのひとつで、家族の履物も作っていたとされる。収蔵品と市販品の比較調査では、収蔵品にはつま先を覆うクローズトゥデザインが多く、市販品はつま先を覆わないオープントゥとベルトタイプデザインが半数みられた。サンダルには複数のモチーフが組み合わされ、収蔵品では葉、花が多く、瑞獣も用いられていた。市販品では花、葉、幾何学柄が用いられ、いずれも葉や花が多用されていた。また収蔵品には幸先が良い、子孫繁栄の意味を持つ蟹や魚が履き口の装飾としてよく見られた。また、収蔵品は 1 種類あたり 7 ～ 8 色で赤、緑、青が使用され、市販品は 8 ～ 9 色で赤、ピンク、黄色が使用されていた。市販品の方が多色で、収蔵品は寒色、市販品は暖色が多くみられた。

サンダルもクロサンもともに相手への想いをモチーフで表現していたことが明らかとなった。しかし現在はプラナカン女性が儀式等で使用する以外に、観光品としてさまざまな服装に合うようにデザインや色・ヒール高が展開されている。時代の変化により使い手が家庭内の特定の存在から観光客へと変化していることにともない、形態を変化させ対応してきたと推察される。

本調査を通して、プラナカン女性は中国の伝統的なモチーフとその持つ意味を重んじ、それに自身の心情を重ね合わせて柄やモチーフに表現していたことが明らかとなった。現代では目的や対象者が変化し、モチーフの持つ意味や風習は薄れているが、プラナカン女性が作り出した伝統的デ

ザインは、ローカルアイデンティティとして染み込み、現代マレーシア文化の一端を担っているといえる。

（4. 執筆：見寺貞子）

5. マラッカの宗教施設と信仰からみた文化的複合性

ここでは、マラッカにみられる宗教的施設の空間分布について、宗教施設の文化的多様性、複合性の視点から報告する。マラッカは、植民地期以来、中国系、アラブ系、インド系、マレー系、欧米系等の多民族が共生してきたが、その中で多様な文化が交錯、融合し、折衷的な独自の生活様式が展開されてきた。数多く点在する多様な宗教の宗教施設もその例外ではなく、ショップハウスが立ち並ぶ町並みの間に数多く点在し、独特の雰囲気と特徴的な景観をつくりだしている。現地調査では 42 ヵ所もの宗教施設（または宗教関連施設）を確認した（表 1）[注6]。南北約 800m、東西 600m という決して広くはないこの地域で宗教施設の集積度はかなり高い。これらの施設の宗教別の構成は仏教寺院 (5)、道教廟宇 (8)、宗祠 (10)、会館 (13)[注7]、モスク (2)、キリスト教教会 (1)、ヒンドゥー教寺院 (1)、儒教 (1)、新興宗教 (1) で、42 ヵ所のうち約 90% の 38 ヵ所が華人（中国系）に関連している。オランダがマラッカを占領した 1645 年にはマレーシア最古の中国仏教寺院である青雲亭が創建され、18 世紀から 19 世紀にかけて華人移民が増えるに伴い、仏教寺院、道教廟宇、イスラムモスク、ヒンドゥー教寺院、宗祠、会館などが次々と創建（建立）されている。

区分		施設名称	成立（創建）	主座
仏教	1	青雲亭	1645 年	観音菩薩
	2	香林寺	不明	仏陀
	3	観音堂	1894 年	准提菩薩
	4	崇徳堂	1897 年	准提菩薩
	5	香山堂	不明	不明
道教	6	広福宮	1906 年以前	広澤尊王
	7	天徳宮	1884 年	註生娘娘
	8	青山宮	1966 年	張公聖君
	9	万寧社	1987 年	山欽海主温州侯王
	10	華徳宮	1863 年以前	温府王爺
	11	三多廟	1795 年	大伯公
	12	峰山宮	1860 年代	清水祖師
	13	湖海殿保生大帝	1899 年	保生大帝
宗祠（同姓）	14	符氏宗祠	1965 年	
	15	頼氏宗祠	不明	
	16	顔氏宗祠	1967 年	
	17	戴氏宗族会（注礼堂）	1957 年	
	18	鐘氏公会	不明	
	19	王氏宗祠（植槐堂）	不明	
	20	徐氏祖屋	1925 年	
	21	鄭氏宗祠（滎陽堂）	不明	
	22	林氏宗祠	1875 年	天后聖母
	23	辛柯祭宗祠	不明	
会館（同郷）	24	岡州会館（広東）	不明	
	25	海南会館（広東）	1869 年	天后聖母
	26	雷州会館（広東）	1898 年	関聖帝君
	27	三水会館（広東）	1919 年	大伯公
	28	徳化会館（福建）	1908 年	
	29	番禺会館（広東）	不明	
	30	潮州会館（広東）	1822 年	華光大帝
	31	福建会館（福建）	1801 年	媽祖娘娘
	32	永春会館（福建）	1800 年	天后聖母
	33	應和会館（広東・客家）	1824 年	
	34	増龍会館（広東）	1792 年	
	35	茶陽会館（広東・客家）	1807 年	関聖帝君
	36	鶴城会館（広東）	不明	
イスラム教	37	Masjid Kampung Kling	1748 年	
	38	Masjid Kampung Hulu	1728 年	
キリスト教	39	Tamil Methodist Church	1908 年	
ヒンドゥー教	40	Sri Poyyatha Vinayagar Moorthi	1781 年	
儒教	41	孔教會	1950 年頃	
新興宗教	42	徳教會（紫昌閣）	1955 年	

表 1.　マラッカの宗教施設

その過程で、宗教や信仰の世界でも複合化が進展したようで、青雲亭に隣りあう香林寺は中国仏教（大乗仏教）の寺院であるが、本尊の裏に上座部仏教の仏陀が祭祀され、通常ではみられない祭祀形態をとっている。中国伝来の道教でも拿督公（ナ・トゥク・コンまたはダトゥク・コン）というマレー半島独自の路傍神が存在している。この神は道教の大伯公（土地神）とも混同される一方、祭壇に三日月やアラビア文字がみられるなどマレーの土着信仰、中国道教、イスラム教が融合しているのが特徴である。

華人系以外の宗教施設でも、2 つのモスクは、マレーシア最古のイスラム建築で、中国式の緑色の四角い屋根をもち、イスラムを受容した当時の中国文化と融合した独特の形をしている。ヒンドゥー教寺院もマレーシア最古といわれ、南インドのパラヴァ様式とは異なる単純な造形に特徴がある。以上のように、マラッカでは多様な宗教施設や信仰がそれぞれの独自性を保ちつつ、ひとつの調和した景観をつくりだしているといえる。

このようにマラッカの狭い地域のなかに多様な民族が共生し、多様な文化、宗教が争うことなく共存している。イ

写真 6.　拿督公の小祠（祭壇にはイスラム帽がみえる）

スラム帽のムスリムやインド系のヒンドゥー教徒が観音堂の前で軽く礼拝する光景は、マラッカという歴史的に多様な民族と共存してきた地域ならではの文化的複合性そのものを表しているようにもみえた。

6. まとめ

以上、2018年度にマラッカで実施した、建築（ショップハウス）、ファッション（装身具）、宗教施設という3つの分野の調査研究について報告した。プラナカンがつくりだしたショップハウスの融合的折衷的な景観は、点在する宗教施設の多様性とともに、植民地の歴史を踏まえたマラッカの独自性に大きな貢献を果たしている。また、プラナカン女性の装身具にみられる文化的複合性は、現代ではマレー文化のアイデンティティと結びつけられて語られている。

このように、東南アジアのプラナカンにみられる生活デザインのハイブリッド性の具体的な側面を捉えることができたが、前年度の報告でも指摘したように、現代ではプラナカンは表面的には観光という経済的文脈で捉えられる一方で、そこで扱われる分野が、女性が支配する家庭内領域に限定され、植民地期に活躍した男性たちの政治経済的領域は排除されている点は見逃せない。マラッカの青雲亭に植民地政府が任命し、華人支配の任に当たったカピタンたちの墓碑がいくつも残されているが、訪れる人も少ないのが印象的であった。

プラナカンの現代性とは、ある意味、きわめて政治的な性格をもっているといわざるをえないが、より具体的な生活のありようを探るなかで、プラナカンの生活の全体像を把握することが求められているのかもしれない。

2018年度の調査および研究には大学院生の鈴木徹、渡辺麻友子、富永明日香、後藤静香の4名が参加し、本プロジェクトの遂行に協力してもらった。記して感謝する。また、写真は注記があるものを除いて、本プロジェクトメンバーが撮影したものである。

注

1)発表時のタイトルと発表者は以下の通り

・「プラナカン建築に見るデザイン様式の融合性―マレーシア・マラッカ旧市街世界遺産保存地区を事例に―」(鈴木徹・渡辺麻友子・長野真紀)

・「装身具のモチーフから見るプラナカン女性の伝統的デザイン―マラッカにおけるアクセサリーとサンダルを事例に―」(渡辺麻友子・鈴木徹・見寺貞子・長野真紀)

・「マラッカの宗教施設とその信仰からみた文化的複合性について」(富永明日香・後藤静・今村文彦)

2)宇高雄志、「マレーシアにおける歴史的市街地の保全:その現状と制度整備上の課題」、『日本建築学会計画系論文集』、第584号、2004、p94

3)都市の人口を統制するために家賃を低水準で凍結したため、家主は不動産収入が見込めず開発・修繕ができなかったが、一方で都市形成と景観が保存された。

4)文化遺産国際協力コンソーシアム平成26年度協力相手国調査、『マレーシア調査報告書』、文化遺産国際協力コンソーシアム、2015、pp.11-17

5)Lillian Tong,"STRAITS CHINESE GOLD JEWELLERY", Eastern Printers Sdn Bhd, 2014, p4

6)現在では華人の居住はマラッカ地域全体に広がり、他の地域に転住する人たちも多い。その結果マラッカ全体では寺廟だけでも100ヵ所以上を数える。

7)会館は基本的に同郷、同業の組織であり神仏の祭祀を伴わないが、東南アジアでは神仏が祀られていることが多い。マラッカでも複数の会館で祭祀をおこなっていることから宗教関連施設としてとらえている。